

さん ぽ う
三方よし

第 2 号

1995/11



白壁と蔵屋敷のまち 五個荘町での
『ぶらりまちかど』の模様

利真於勤

近江商人の金言名句

『利は勤むるにおいて真なり』と読む。これは、豊郷の初代伊藤忠兵衛の座右の銘「商売は菩薩の業、商売道の尊さは、売り買い何れをも益し、世の不足をうずめ、御仏の心にかなうもの 利真於勤」の中に出てくる言葉で、近江商人の利益の本質をいえた言葉である。

利益第一、利益を目的に人は行動するとする経済理論とは大いに異なり、世の中の需給を調整するのが商人の任務で、その任務を遂行したときに、余沢として利益が得られるという商人の社会的責任を重視する理念である。その昔、冒険商人が巨利を貪り、独占を画し、世間から阻害されたのとは打って変わった近代の商人道が江戸時代中期にすでに意識されていたことに注目される。

CONTENTS

■シリーズ第二回
現代に生きる

近江商人の知恵……………2～3頁

■近江商人北進地

江差・松前を訪ねて……………4～5頁

■まちかど美術館・博物館……………6頁

■求めるものは商人の志と叡智

「新近江商人塾」開催……………7頁

■『近江商人』キャラクター

愛称は「湖太郎」に決定！

てんびん棒……………8頁

現代に生きる

近江商人の知恵

岡崎女子短期大学講師

井 口 貢

第2回

前期資本主義の時代ともいえる江戸期に、倫理を重んじ本分を務めることを強調した家訓が近江商人には多く残されている。日野の豪商中井源左衛門の「金持商人一枚起請文」を通して、彼らの商いの精神を探って見る。

● 倫理と本分

一九九五年、秋半ば。経済犯罪はあいも変わらずくすぶり続け、そして何よりも、ひとつの『宗教団体』が引き起こした史上希有の狂気と社会不安は、大きな傷あとを多くの人々の心や体に残し続けている。こうした事態をみるにつけて、近代法では律しきれない人の心の内面に、関わる問題と、近代法以前の、規範の本質ともいえる何か大きなもの（これを広い意味で倫理といってもよいだろう）の欠落を思わざるを得ない。

失ってしまったているのではと思わざるを得ない。かつて、バブル経済の時代の晩年に堤清二氏は雑誌のインタビュー記事のなかで、日本の足りない点は「フィロソフィー」であり、「自分のおカネなら何をしてもいい」という前期素朴資本主義的要素をなくさないと国際社会から排撃されます」と語った。しかし、近代法も存在しない前期資本主義の時代ともいえる江戸期に、倫理を重んじ本分を務めることを強調し、自分で稼いだおカネでも勝手気ままに使うことを強く戒める趣旨の優れた家訓が多く残されているという事実を忘れてはならない。そして、自家

の商いを子々孫々の代に至るまで立ち行かせることのできた近江の豪商たちは、例外なくストイックな精神をその家訓のなか



道中厨子
高さ12cmの厨子の中に仏像が入っている。
近江商人たちは、信仰心が厚く、商売で旅をするとき必ず持ち歩いたと言われている。

● 商いの精神と家訓

に、何物にも代えがたい貴重な財産として、永遠に残そうとし

ているかのようである。

名を成した近江商人たちは、商いを末代に渡って永く立ち行かせるためには、投機的商法と悪徳商法は先ずもって排除しなければならぬものであるということを熟知していた。彼らの家訓に共通して認められる基本的な哲学、『三方よし』や『正直・信用・儉約』などはまさにその象徴であろう。石田梅岩の言葉に残る「屏風と商人は真つ直ぐの所でない」と立たない」という石門心学を思想を企業家精

神にまで高めたというのは過言であろうか。

■ 金持商人一枚起請文

それは、こうした商いの倫理と精神はどこから生まれてきたのだろうか。近江商人の家訓の中でも圧巻といえる日野・中井家の初代中井源左衛門良祐による「金持商人一枚起請文」①を中心にして考えてみたい。そもそもこの表題は、良祐が尊敬していた法然②の起請文の書式に倣って彼の商いの観を表現しようとしたからであり、仏教に対する深い関心と厚い信仰に基づくものであったといえよう。また、長寿と始末を説いた後に登場する「此外に食欲を思はば先祖の憐れみにはづれ、天理にもれ候べし」というくだりは、まさに故江頭恒治氏がその名著『近江商人・中井家の研究』③で指摘した「神・儒・仏が渾然一体となった日本のエトス」④であり「近江商人の商人道の基盤」の表明に他ならない。

■ 始末と吝きの違い

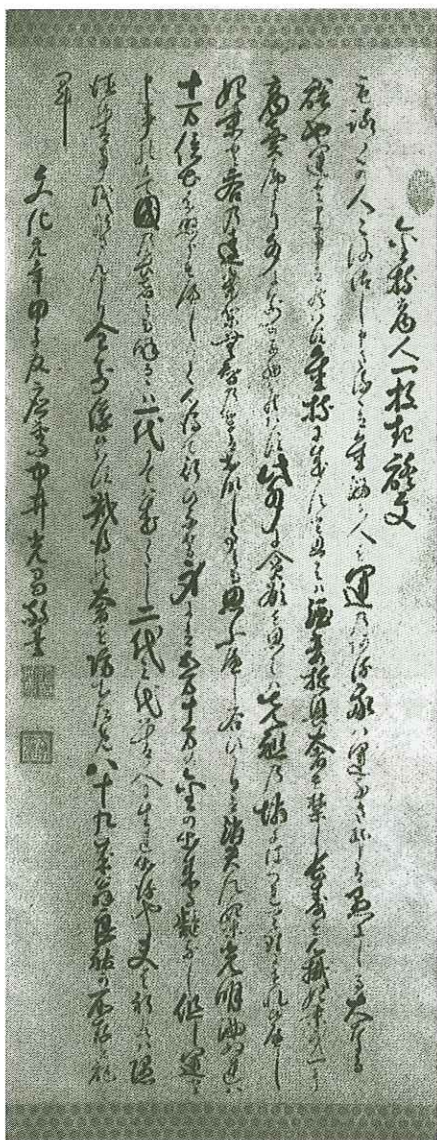
「始末と吝きの違あり。無知の輩は同事とも思ふべきか」

この言葉は、近江商人の『儉約』そして『利は余沢』の精神に通じていくと同時に、長期的な視野に立つて経済的な合理性を追及する姿勢の表れでもある。すなわち、始末とはケチで安売りに徹することではない。ここが吝きとの違いである。「安物買いのゼニ失い」とか「安からう、悪からう」という言葉がある

るが、良い品を顧客に提供するために、人件費を含めて最低限必要な経費というものがある。この最低限のラインを越えてしまえば、これはケチであり吝きなのである。結果として、その商法は一時小金を得ても、やがて悪品は顧客からの信用を失う。商売も永くは続かない。一方、必要最低限の投資は惜

もろもろの八々沙汰しもうさるるハ、金溜る人を運のある、我は運なき杯と申ハ、愚にして大なる誤なり。運と申事は候はず。金持にならんと思はば、酒宴遊興奢を禁じ、長寿を心掛、始末第一に、商売を励むより外に仔細は候はず。此外に貪慾を思はば先祖の憐みにより外に仔細は候はず。始末と吝きの違あり。無智の輩は同事とも思ふべきか。吝光りには消えうせぬ、始末の光明満ぬれば、十萬億土を照すべし。かく心得て行ひなせる身には、五萬十萬の金出来るハ疑ひなし。但運と申事の候て、国の長者とも呼べる事は、一代にては成かたし。二代三代もつづいて善人の生まれ出る也。それを祈候には、陰徳善事をなさんより全別儀候はず。後の子孫の奢を防んため、愚老の所在を書記畢。

(文化二丑正月 九十翁中井良祐識)



日野中井源左衛門家の「金持商人一枚起請文」

しまずに成すが、必要以上に華美で見栄による出資は厳に戒める。これが始末の要諦だ。こんな例で考えてみよう。自宅の急な階段に照明をつけるのを惜しんだ人がいる。ある夜この人は暗がりのなか階段を踏み外して両足を骨折してしまった。おかげで何か月も仕事ができずに、おまけに入院費もかさんでしまった。二重の損失である。目先のわずかな出費を惜しんだことによつて、将来の大きな損失を招いたこの人はケチ、すなわち吝きに他ならない。ここで必要なことは、わずか三十ワットの蛍光灯を取り付ければよいのである。これが始末である。万が一、宝石をちりばめた豪華なシャンデリアを付けければ、始末からは大きくはずれてしまい、それは

良祐も戒める「奢り」以外の何物でもなくなってしまう。こうして始末することによつて紡ぎだされた利潤は、自己の私腹を肥やすためではなく、社会のために使う。あるいは奉公人の福利厚生のために使う。

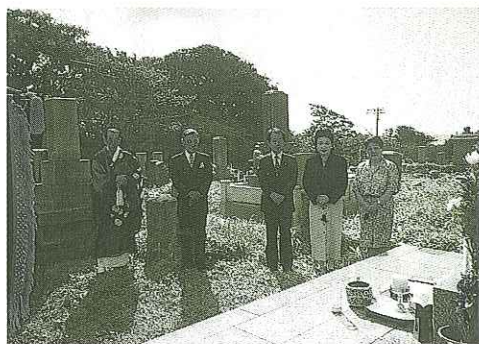
■利は余沢 そして陰徳善事へ

利益の社会還元。これが『利は余沢』の発想から導きだされる。おそらく、ケチで吝きな商人にとつては『利は(自己の)贅沢(のため)』であつたに違いない。彼らが、職分に基づく勤労に倫理的価値を認める余裕と消費の社会的有用性を理解する心とを少しでも併せもつていたとしたら、巨額のカネを遊郭で一晩で蕩尽するという愚かなことも起こさなかつたはずである。もちろん、『儉約』も『利は余沢』とは貨幣の表裏の関係にある。さきにも登場した石田梅岩は、「儉約とは人を愛することである」と語つたといわれているが、この考え方は『三方よし』の発想に連なっていく。節約した結果得られた余沢を社会に還元するということは、他人への思いやりの表明であり、社会貢献は社会への愛と人間愛の証なのである。節減して得られたものを、自己愛、自分の贅沢

と快楽のためだけに使うならば吝きであり、人や社会のために使うならばこれが始末・儉約なのである。そして、この社会貢献の精神こそが良祐の起請文の末尾において「陰徳善事」という言葉で表現されているものである。「人知れず社会に尽くす」という意をもつこの言葉は、平生の心がけの大切さをうたつたものでもあり、付焼刃の打算に基づくような寄付善行は否定される。経営体を維持し、末代にいたるまでの信用を得るためには当然のことである。企業メセナやフィランソロピー^⑤という概念、その本質はこの「陰徳善事」でなければならぬと思うのだがどうだろう。(次稿ではその点を考えてみたい)

(注)

- ① 初代良祐が生涯五度にわたつて書き直したといわれているが、現在広く流布しているのは、一八〇五(文化二)年、良祐九十歳のときのものである。なお、良祐は石門派の心学者とも広く交友があった。
- ② 法然(一一三三～一二一二) 浄土宗の開祖。
- ③ 近江商人に関する本格的な研究のさざがけとなつた善書。
- ④ 一八六五(昭和四〇)年、雄山閣から初版発行。
- ⑤ 人間を内面からの特定の倫理的価値や規範に基づいて、一定の行為に向けて働き動かす力。例えば「信仰に基づく禁欲の精神が日常の勤勉な労働の原動力になる」という様なところを指す場合、この禁欲の精神はひとつのエトスにある。国民性や県民気質というのも広義のエトスと考えるといいだろう。
- ⑥ 企業による芸術・文化支援と社会貢献。



近江商人北進地

江差・松前を訪ねて

— 先達物故者法要に参加 —



AKINDO会議 秋村 太

近江から北海道までかつて近江商人は、何日もの日数をかけて出かけていった。ところが今、私たちは、わずか二時間余で北の地を踏むことができる。函館空港に向かう機内で、ずっと窓から外を見ていた大平さん（同行したAKINDO会議委員）が、突然「あれや、あれや。見てみ」指差された先には、目的地の松前・江差が広がる。すかつと晴れ渡った空と、き

れいな色の海に挟まれて、緑の半島が見えてきた。

「先つちよが松前、向こう側にあるのが江差や」という大平さんの声に、私は「とうとう来たのか、先人の開拓の地に」と緊張した。

北進近江商人の偉業を讃え、先人の霊をなぐさめる法要が、毎年、全国滋賀県人会連合会の方々によって催されている。本年は、この法要に私たちが参加したのである。法要は、現地の方々が「一年を通して珍しい程」といわれる位の晴天に恵まれた九月二十二日、厳粛に行われた。「北進近江商人先達物故者之碑」は、松前町唐津の専念寺ののどかな素晴らしい環境の中に建てられていた。

「服の絵は百万語に匹敵する」といわれる通り、松前城郷土資料館に展示されている当時の松前の様子を描写した「松前屏風」は、町の繁栄を充分に思い



知らされる華麗さであり、平成三年に開館した松前藩屋敷は、江戸時代の松前藩の面影を偲ばせるものばかりである。最北の城下町で近江商人が活躍した様子が目に浮かんでくる。

この繁栄した素晴らしい町も、函館戦争で三分の二が焼失し、今も松前城の石垣には大砲の弾が当たって出来た窪みや、焦げた跡が残っていた。

江差では、日本海沿岸の漁家を相手に仲買商を営んでいた近江商人、大橋宇兵衛が建てた「旧中村家住宅」を見学。ここでは、近江商人の知恵や情報収集力に驚嘆し、奥方を乗せて京都・大阪へ歌舞伎等見物に、危険な船旅を夫人同伴ですその行動力に感心してしまう。この「中村家」は国指定重要

文化財となっており、昭和五十七年に修復が完了し一般公開されている。

江差の人々は、今も近江商人が町を築いた、彼らのおかげで繁栄があったという気持ちがいっぱいであるという。そんな気持ちの町の随所に息づいている。

今回の旅で、力強く進められている松前城復元整備計画や、幕末に北海道を舞台に繰りひろげられた戊辰戦争の遺品、開陽丸の全面的活用など、時代を超えて歴史的文化遺産を守りつつ、未来をみつめて進む北海道の人々の開拓者精神に、大きな感動を覚えた。この地で、かつて近江商人たちは、新しい歴史の一頁を明日に向かって築きあげてきたのであろう。

三日間とも晴天に恵まれたが、出ていた太陽以上に私たちの心を暖かくしてくれたのは、当地の方々のおもてなしであった。毎年北進近江商人の先達の法要を地元県人会の人々は献心的に対応していただいている。その気持ちに熱いものがこみあがってきた。



近江商人の北海道開拓

北海道に進出した近江商人は天正十六年（一五八八）に種子の行商に出かけた愛知郡柳川村（現在の彦根市）の建部七郎右衛門が最初と伝えられている。近江八幡の岡田弥三右衛門は松前の城下で恵比寿屋を開店し、呉服・太物・荒物などを扱った。そして、西川伝右衛門は二十三歳で北海道に渡り、松前藩の御用商人となり住吉屋と称して活躍し、やがて海運業や漁業を行い場所請負制度を確立した。

北海道へは各地から多くの商人が進出したが、そんな中で近江商人が生き残った根底には、その正直さや親切さがあったといわれている。

最北の城下町松前町

最北の城下町松前は、井伊家が藩主であった時期があり、近江とは古くより大きな繋がりがあり、松前の春は多くの桜に彩られ、落ちついた雰囲気町中に漂っている。

しかし、徳川脱走軍の松前城攻防戦で城下町の三分の一が灰燼に帰し、その後も続く大火に見舞われ古い町家を偲ぶようでもなかった。平成三年四月に「松前藩屋敷」が建設された。奉行所をはじめ土蔵二棟を含む一四棟の蝦夷地の特徴をもった建物が完成した。中でも商家は「近江



前船が北上する過程で日本海沿岸で積み込んだ各地の商品が揃えられている。その後も建物が増え、周辺の設備も充実されてきている。

屋」という屋号を付している。これは松前で活躍した多くの近江商人の功績を顕彰したものであった。近江八幡と柳川・薩摩(彦根市)の商人は松前町の中心部に店舗を構え、両浜組という組織をつくり、松前藩と直接交渉をして場所請負人となったり、税役の遞減等によって、蝦夷地交易物資を北前船によって運搬し、日本の経済交流の中に蝦夷地物産を組み入れた功績が極めて大きかったのである。

北海道へ持ち込まれた商品は、米・酒・麴・塩・煙草・古着・漆器などで、内地に持ちかえったものは水産物とその加工品・鯨・鰯・鮭・鱒などで、日本海経由で近江を通じて京阪地方へ供給された。

松前藩は当時土地に対する支配権だけを持っていて、漁業などの生産活動は蝦夷がおこない、藩士は蝦夷と交易をしていたが、やがて交易は商人に委され、商人がこの場所の経営にあたり藩士は運上金だけを受け取るという「場所請負」の制度と移行した。そして、入港する船の積み荷に関税を課していた。

ところが、松前藩は両浜商人つまり、八幡や柳川・薩摩の商人に「両浜組」という仲間を組ませ、入港に關しての種々の特権を与え、移入関税を免除した。それだけ近江商人の信用があり、貢献が大であったことを物語っている。

京のお節料理は近江商人の販売戦略！

享保を過ぎる頃、内地で貨幣経済が浸透し、商人の経済力が大きくなり、各地で商人の資本による地場産業が盛大になってくるが、北海道でも商人が自ら場所の漁業を経営するにいたり、漁具や漁法の改良や資本の貸付が商人の手によってなされ、水産加工法の改良があった。そして水産物の多くが北前船で近江経由で京都・大阪に運ばれた。お節料理の本場京都で鯨・数の子・棒鱈・昆布巻きなど北海道産の貯蔵食品を主体となった裏には、近江商人の販売戦略が大きな影響を及ぼしていたのであった。

地域貢献があつて商売の利益が

松前藩が近江商人の「両浜組」に多くの特権を与える。一方、御用金を申しつけるときは、いつも両浜組を利用した。寛延四年(一七五二)には一五〇〇両、宝暦六年(一七五六)にも一五〇〇両の御用金が申しつけられている。蝦夷の地が近江商人進出の舞台となった背景には、たんに商品売りつけて金儲けをするだけでなく、地域の生活向上に、あるいは文化の発展に貢献したうえでの商業活動が成功の鍵を握っていたのである。松前城下の祭礼で東西二台の山車が出るが、この費用は西川伝右衛門・岡田弥三右衛門・藤野喜兵衛らが寄付したといわれている。

江差追分が流れる江差町

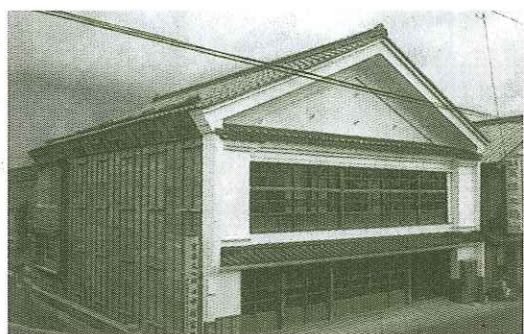
〔近江商人の屋敷跡〕

・旧中村家住宅

(国指定重要文化財)

中歌町の旧中村家は、能登川から江差に移った近江商人大橋宇兵衛が建てたもので、越前石を積み上げた土台に、総ヒノキ切妻造りの大きな二階建ての母屋など、当時の問屋建築の代表的な造りとなっている。大正初期に中村米吉が大橋家より譲り受け、昭和四十六年に国の重要文化財に指定された。

近江商人たちによって築き上げられた多くの文化遺産が町中に存在し、八百年の歴史に培われた伝統が脈々と受け継がれ、江差追分が流れる口マンある町である。京都祇園まつりの流れをくむ祭ばやしと豪華な山車が町を練り歩き北海道最古の姥神大神宮祭典は江差の繁栄を今に伝え、人々は祭りに酔いしれる。北前船の交易により、江差の町は賑わい、上方文化が流入し江差文化が生まれ育った。北前船交易で活躍した近江商人の屋敷などが保存公開されていて、往時の繁栄を知ることができる。



白壁と蔵屋敷のまち 五個荘
展示施設と展示案内

ふりまかど
美術館・博物館

美とこころのふれあい

9月23日(祝)

AM9:00~PM4:00



白かべのまち五個荘

まちかど美術館・博物館

白壁と蔵屋敷のまち「五個荘」では去る九月二十三日、町内の近江商人たちの屋敷を開放して秘蔵の書画などの展示や蔵を利用した各種イベントが開催された。いつもは静かな町内も県内外からの見物の人が訪れ、大いに賑わった。

町内一帯を美術館・博物館とした催しは本年が初めてで、若い新進の作家の作品の展示や屋敷の庭で繰り広げられるコンサートに、若い人たちの人氣が集中していた。

一方質素儉約の精神で営々と築き上げてきた五個荘商人の各旧家では、貴重な焼物や書画、福沢諭吉や勝海舟の直筆などが公開された。五個荘商人の財力の豊さと交遊の広さを語るものがあまりにも多いことに驚かさ



れる。町内のボランティアガイドのみなさんも大活躍で案内しつつも、初めてみる各家の秘蔵品に興味が続いていた。

役場の職員も和服姿で、秋の一日五個荘のまちは大正時代の雰囲気漂っていた。

近江商人関係資料館めぐり①

五個荘町近江商人屋敷

「きまぐれに近江路をあるいていたところ、神崎郡の田園のなかで五個荘町という集落にまぎれこんだことがある。」

この町のうち、もと南五個荘村とよばれた村は、近江におけるいくつかの大商人輩出地として知られている。その村の字に金堂という集落があるが、私がまぎれこんだのはその集落だった。歩くうちに、その田園のなかで軒をよせあう集落ぜんぶが、舟板塀をめぐらし、白壁の土蔵をあちこちに配して、とほうもなく宏壮な大屋敷ばかりであることに驚かされた。

この金堂の集落を歩くに「外村」という家を見た。やはり明治の建築かと思えるが、ぬきん出て軽荘で清らかな色気さえ感じさせた……(略)「司馬遼太郎は、『街道をゆく24』で五個荘金堂をこのように語っている。

「外村」という屋敷は司馬遼太郎の想像



どおり作家外村繁の生家であり、平成二年より近江商人屋敷として保存公開されている。屋敷内には執筆に使われた机や文房具などが展示され、彼の初期の「商店もの」といわれる一連の作品の舞台となった部屋や庭が現存し、近江商人の生活の様子を多くみることが出来る。平成六年には隣接する本家「外村宇兵衛家」も改修され近江商人屋敷として併せて公開されている。

午前九時～十六時
月曜・金曜 祭日の翌日は休館
神崎郡五個荘町金堂六三二
〇七四八―四八―五六七六

求めるものは商人の志と叡智 「新近江商人塾」盛大に開催

AKINDDO委員会主催の平成7年度「新近江商人塾」は九月八日から、のべ四日間の日程で開催された。近江商人のチャレンジ精神と行動力に学びながら、新しい商人像を探るのが狙いで今回が第一期目。若手商店主や銀行マン、流通・サービス業関係者ら二十六人が受講した。『感動産業化』をテーマに、ジャーナリストの緒方知行氏がコーディネーターとなり、DS業界、サービス業界をリードする四講師がそれぞれの実践哲学を披露した。

神奈川県相模市・横浜市での現地研修には、十九名が参加。デイスカウト店のアイワールド、横浜の元町商店街、みなとみらい21などを視察したあと、現地で活躍する近江商人・神奈川滋賀県人会副会長 田附弘一氏から体験談を聞いた。

◆変化とは、チャンスである——緒方氏——

変化の時代——過去の常識が通用しない時代（新旧交代の時代）になっている。「変化に対応できないと新しい時代には存続出来ない」ことは、歴史が教えている。変化を敵にしてはいけない、味方にすべきである。

不況だからすべてがダメになるわけではない、変化を味方につけ業績向上を躍進している企業はいくらでもある。大は有利、小は不利という考え方は、古い常識である。

◎自己革新——存続への道

企業は市場によって生かされている。つまり、お客の支持によってのみ成り立つのである。支持なくして業績や売上げは存在しない。その市場にお客様の支持が変わってしまったのである。よって自らも変わらなないとその支持はついてこないのである。自己革新のみが、この変化を味方につける唯一の方法なのである。

売り手市場から買い手市場へ変化した時代に、過去の経験は一つ役立たなくなつた。これまでの体制、仕組み、考え方を根本から見直すことが必要なのである。

不況とは、新しい市場が見つけないことであるとすれば、買い手市場からの踏み込み



◆近江商人の倫理感に真の商人魂を知った

神奈川滋賀県人会 田附弘一氏

が不十分であるということであり、人々が求めている価値の方向、満足の方向、豊かさの方向が何であるかがつかめていないことである。

◎感動こそが新しい需要

あらゆる物資が飽和している現在、未だ満たされざる市場は何か。人々が求めているものは

モノではない。常に人間らしく豊かでありたいと願う心の充足である。モノを貰ってもそう嬉しくない。だが、そのモノに込められた人の心には感動するのである。

この感動こそが、これからの需要のベースになるだろう。この世界に不況は存在しない。

また、関東では「商魂たくましい」と言う台詞が、手段を選ばず自己の利益追求にのみ狂奔する悪徳商人の形容詞に使われ、暗に近江商人を当てこすられ、口惜しい思いもしたので、ルーツを求め、日野の中井源左衛門の金持商人一枚起請文を始め、五個庄の外村家の文獻、近江聖人と称えられた中江藤樹先生の書まで辿り着き、その倫理性の高さに感激した。

商魂の真実の意味は、お客様の幸福のためには、我が利益も我が身も忘れて奉仕する商人の姿だった。そう解つてから、私は滋賀出身を隠さなくなった。しかし、悲しいかな人間として未熟な商道修行中の我が身、実践が伴わない。その当時、鎌倉であるお坊様に会い「人の誠

を尽すとは商人として具体的にどうするか」と問いかけられた。突然の質問に、しどろもどろ「良心に恥じない限り、自分のして欲しい事をお客様にして上げることでいい」と答えたところ、「それは総ての人を愛する事だよ」と言われ考え込んでしまった。

私は人一倍好悪の感情が激しく、清く正しい人には憧れるが、邪悪な人、盗みをしたり人を傷付けたりする人を愛するどころか許す事もできない。できなければ、人の誠を尽す商人には生涯なれないのかと、悩んだ末、せめて真似でも芝居でも十年二十年と続けることにより、あるべき姿に近づく事ができるのではないかと心に決めて商いに励んでいる。

お知らせ



『近江商人』キャラクター
愛称は「湖太郎」に決定！

中学校の学習教材として制作したビデオ『近江商人』に登場するマンガのキャラクターの名称を県内の中学生から募集していたが、十八校から六四二点の応募があり、審査の結果、滋賀大学教育学部附属中学校三年生高橋俊之君の「湖太郎」を最優秀賞に選り、採用させていただきます。採用名称は今後当委員会が発行する印刷物などに掲載していきます。

■最優秀賞には高橋俊之君（滋賀大学付属中）

『湖太郎』

入賞作品
優秀賞

キャラクター名
キャラクター名

学校名

氏名

商吉くん

草津中

毛利剛之

てんびんたろう

安曇川中

柳澤良典

まいど太郎

甲西中

井手口昌代

おきばり君

甲西中

傍田千佳希

びわ太郎

長浜北中

吉岡由佑子

びわ太郎

滋賀大学附属中

福井朋子

ユニーク賞

甲西中

土屋智子

てんびんマン

聖徳中

竹中雅哉

もうかりますぞう

甲西中

青木保志

LAKE琵琶ぞう

滋賀大学附属中

弘中志央

商びわ吉

滋賀大学附属中

加井良美

恒例の家訓カレンダー

★本年は「近江商人の知恵と商法」

例年、各方面より好評をいただいている近江商人の家訓カレンダーの制作を進めています。

が、まもなく発行の予定です。本年は社名入れのご要望にもお応えできる体制です。ご希望の場合は至急お申し込み下さい。

■社名入り

・千部まで一冊三百円

・千部以上一冊二百六十円

なお「近江商人資料館マップ」に広告協賛の場合には、百冊無料進呈します。

（マップ協賛広告は一口二万円）

それぞれ詳細はAKINDO委員会まで

☎〇七七五—三三四六四一

近江商人資料館マップへのご協賛お願い

AKINDO会議では、県内の近江商人関係資料館のガイドマップの作成を進めています。これは、湖東・中部・彦根・高島の各地の近江商人関係資料館や史跡および観光資源を掲載し、車や徒歩での散策に利用できることを目的とし、近江商人のふるさとに関する一層のご理解を深めていただくことを期待するものです。AKINDO会議では、マップに協賛いただける企業を募集しており、協賛企業へは平成八年の近江商人家訓カレンダーを百冊進呈いたします。

マップは一万二千部作成し、県内の観光情報機関および各地資料館などに無料で配付し、来春の発行を予定しています。

てんびん棒

11月1日より食料管理制度が大きく変わり、ヤミ米という言葉がなくなる。米穀通帳というものを言葉でだけしか知らないが、この言葉すら知らない世代も多くなってきた。NHK大河ドラマでは、吉宗はたびたび米の価格を操作するが余りうまくいかなかったようである。現在の消費・流通の中で米の価格は指標となることはあっても根幹としての影響力は少ない。時代とともに経済指標の中心的存在は変化する。「新近江商人塾」では「変化はチャンスであり、この世界に不況は存在しない」と緒方氏が力説されていた。新しい時代には、それぞれの時代に即した新しい方法がある。自らの志と敏智こそが最大の味方であることがわかる。

創刊号はおかげさまで、予想を越えた大きな反響をいただいた。今、近江商人の商法と商売に対する理念が再発見されているのではないだろうか。

「三方よし」は読者のみなさんからの寄稿なども掲載し、より充実した情報紙を目指していきたいと考えております。ご意見などご自由にお寄せいただきたくお願い申し上げます。